2011年　9月8日・「週間きたかみ」では

生きる苦悩を共有し…
「命が危ない311人詩集」発刊
思いを表現　8人の本県関連の詩人たち

東京の出版社（株）コールサック社は「命が危ない311詩集」―いま共にふみだすために―を発刊した。過去から現代までの諸相に表れる「命」の危機を、詩人の精神と心に同調させて把握し、人類史の始原まで遡及した。自然界との関わりでの命の連鎖や、東日本大震災、原発事故から生まれた切実な命の詩篇までを総合的に収録。書名通り311人が参加し、延べ人数325人で379編を収載した。14人の作品が複数の章で掲載されている。

同社発行の「原爆詩一八一人集」「生活語詩二七六人集」「大空襲三一〇人集」「鎮魂詩四〇四人集」の4冊の詩選集を背景にしている。

「こども」を第1章に据え、子供の命の願いから始まり、順次、疎外や反骨の「仕事、世の中」、共生する「動物、草花と共に」、年間3万人以上も自ら命を絶つ国の「自死ということ」、高齢化社会での悲劇も表出する「病気も老いも生きぬいて」、荒廃した「農村、山里にて」、鎮魂歌である「レクイエム」、決して過去の問題にしてはならない「戦争と平和」、自由を脅かした禍根の「歴史と自由」、命を取り巻く現実を「考える、感じる」、そして「東日本大地震、津波など」（Ⅰ東日本大震災の状況・Ⅱ東日本大震災をこえて・Ⅲ過去の災害）、さらに「原発」（Ⅰ原発と文明・Ⅱ全国の原発・Ⅲ福島原発）。しかし、これで終えるのではない。希望を見つめる「願いと祈り」が必要であり、全13章で締めくくった。

現在的な時空間にあって、命そのものの内的・外的な対象として多方面から埋め尽くすような理解があって、始めて編集が可能になるようである。

作品からの突き刺すような言の葉の群れは、生命が置かれた現世の厳しい状況をほうふつとさせる。しかも、展望のない現実に否応なく存在させられがゆえに、そこから発する命の声は、聴こうと聴こえまいと、悲哀、不安、諦念でしかない。傷ついた精神を持つ命には、言葉以外に、真摯に寄り添う姿勢と心が求められる。作品群は命がやむなく発する音を、詩人の魂の「責任」として紡いだといってもいい。他者の苦悩を自らのものとして引き受ける覚悟があるが故に詩人としての言葉に変容し、同時に、世界内存在としての自覚ある「詩人」としての責任の理解かもしれない。「（略）複雑な社会状況のもとで、苦しみ、かなしみ、憤り、たたかい、喜び、楽しみ、手をつなぎ、悩み、考えている多くの人々に私たちはこの詩集をそっと届けたい」と編註末尾に記してあった。

本県に関係する収録詩人では、北上市の斎藤彰吾、東梅洋子2氏、朝倉宏哉、金野清人、照井良平、宮静枝、森三紗、若松丈太郎6氏の名前が見える。命と感情の架け橋になるべき言葉が響いてくるようだ。

と紹介されています。